

甲虫ニュース

No. 54

December, 1981

COLEOPTERISTS' NEWS

西表島で採集された *Chlaenius pictus* CHAUDOIR ミナミアトワアオゴミムシ (新称)

笠原 須磨生

Chlaenius pictus CHAUDOIR は、わが国では BATES (1873) が長崎から記録している。分布の可能性もあるので断言はできないが、これは、*C. virgulifer* CHAUDOIR を誤認したものと考えられ、CSIKI (1931) も Junk の甲虫目録に疑問符を付けている。このためか、わが国では UENO (1963) による Java 産の雄交尾器の図示によって初めて正しく指摘されるまで、*pictus* は *C. micans* FABRICIUS や *C. hamifer* CHAUDOIR 等と混同されていたし、真の *pictus* の確実な記録もないようである。

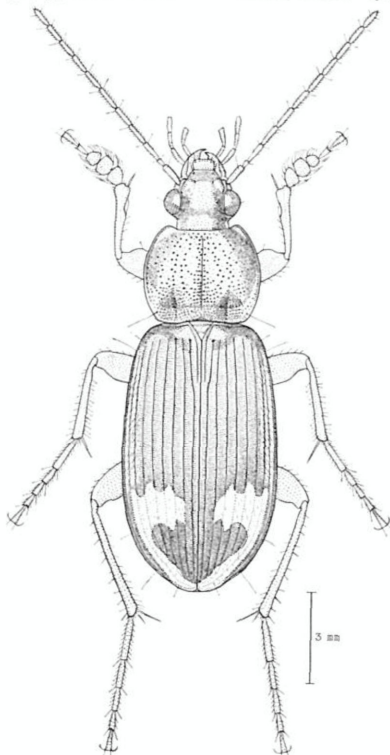
筆者が沖縄県西表島で得たアオゴミムシ類の中に、雄交尾器や翅端紋の位置形状が *pictus* に酷似するものがあった、これは一応 *Chlaenius* sp. として報告しておいたが (笠原, 1981)、最近、国立科学博物館の上野俊一博士のご好意により、Java 産の *pictus* ♂♀の標本 (C. J. LOUWERENS 同定) を拝借して西表島産のものと比較してみることができた。その結果、両者には地理的変異と思われる若干の相違はあるが、基本的な特徴はよく一致するので、西表島産を *pictus* と認め、邦産の記録として簡略な記載をそえて紹介しておこうと思う。なお、西表島産の個体にみられる特徴は安定しているようだが、これに新たな亜種名を与えることは、さらに南方各地の豊富な標本と比較検討してからでも遅くはなからう。

本稿に関し、貴重な標本と文献の貸与のみならず、多くのご助言を賜わった上野俊一博士に心から感謝の意を表したい。

Chlaenius pictus CHAUDOIR ミナミアトワアオゴミムシ (新称)

CHAUDOIR, 1856, p. 208, 1876, p. 62; BATES, 1873, p. 247 (?), 1891, p. 327, 1892, p. 311; CSIKI, 1931, p. 967, 978; ANDREWES, 1941, p. 308; UENO, 1964, p. 262, fig. 11; 笠原, 1981, p. 64, pl. 7, fig. 3.

記載：体長 12.5~14mm, 体幅 4.65~5.25 mm, 頭部, 前胸背板, 小楯板は光沢の強い緑銅または赤銅色。翅鞘は光沢鈍く、黒緑色。翅端紋は汚黄色。触角, 脚, 口鬚は黄褐色。口鬚末節は先端を除き暗色。上唇, 大腮, 頭楯前縁, 前胸背側縁は赤褐色。体下面は腹部腹板末節の後縁が褐色で他は黒色, 弱い虹光沢がある。頭部は大小混えた点刻があり, きわめて浅い前頭溝と後頭部では密。眼の内側にしわがあり, 頭頂部にも弱いしわがある。眼は適度に大きく半球状。こめかみは短く斜め。触角はやや細く長い。基方各節の長さの比はおおよそ $1=3<4=5$ 。下唇鬚は切斷状の先端へ弱く拡がり, ♂でやや幅広いが, ♂♀の差は少い。前胸背板は適度に中高。中央やや後方でもっとも幅広く, 側縁は一樣になめらかな弧状。前方へより強くせばまり, 側縁の縁取りは後角の前方で消失する。前縁の湾入は弱く, 前角は丸く, わずかに突出する。後縁はわずかに湾入し, 両側は軽く斜め。後角は鈍く丸い。全面に有毛の粗大点刻とその間に小点刻と弱いしわがあり, 部分的に微細印刻がかすかに認められる。大点刻は正中溝に沿って列状に, その外側に間をおいて不規則ながらやや縦列状に並ぶ



第1図 *Chlaenius pictus* CHAUDOIR
ミナミアトワアオゴミムシ

傾向がある。基部では密。基部両側の凹陷とその外側では横列してしわ状になる。基部凹陷はやや深く、最深部は短い線状。正中溝は深く、前後縁に達しない。前胸背の幅/長さは、1.233~1.309, 平均1.265。♂♀にかかわりなく見かけ上もやや変化がある。翅鞘は長卵形、適度に中高。中央でもっとも幅広く、翅鞘の幅/前胸背の幅は、♂ 1.338~1.387, 平均1.358, ♀ 1.417~1.466, 平均1.429。翅鞘の長さ/幅は、♂ 1.677~1.734, 平均1.701, ♀ 1.624~1.657, 平均1.642。条溝は深く、点刻され、基部小条はやや長い。間室はわずかに高まり、黄色毛を有する点刻が密に横列してくわ状に見える。微細印刻は明らかで等径状。小橋板は三角形。コマ形の翅端紋は前半部が第3~8間室にわたり、第4間室で前後に、第6, 8間室で前方に突出し、後半の帯状部は翅端の近くで外縁に達する。体下面は、前胸突起が縁取られ、前胸板、同側板、中胸、後胸各前側板は部分的に粗大点刻があり、腹部腹板第1~3節にも点刻がある。第4~末節には微小な搔傷様の点刻があり、細毛が疎生する。末節後縁は両側が軽く湾入し、外縁からやや離れて両側に♂1, ♀2の毛がある。雄交尾器陰茎は基方 $\frac{1}{3}$ で強く湾曲し、湾曲部下面中央は竜骨状に隆起して前方へ延びる。先端部は背面から見て左側が先の丸いくちばし状に突出して軽く下方にそる。先端版の下面にはきわめて微弱な顆粒が散在する。

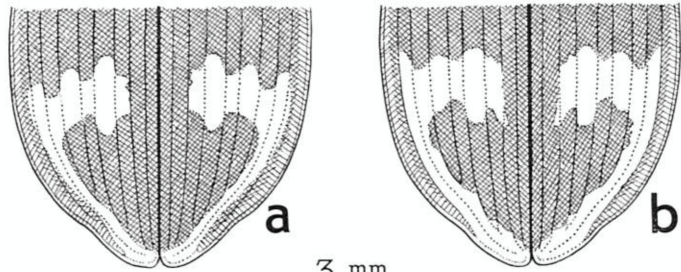
検視標本；沖縄県西表島大原, 2♂♂, 7.vi.1979; 3♂♂3♀♀, 15, 20. iv. 1980, 筆者採集, すべて水銀灯に飛来したもの。

分布：日本(沖縄県), 中国, ビルマ, 印度, ジャワ。

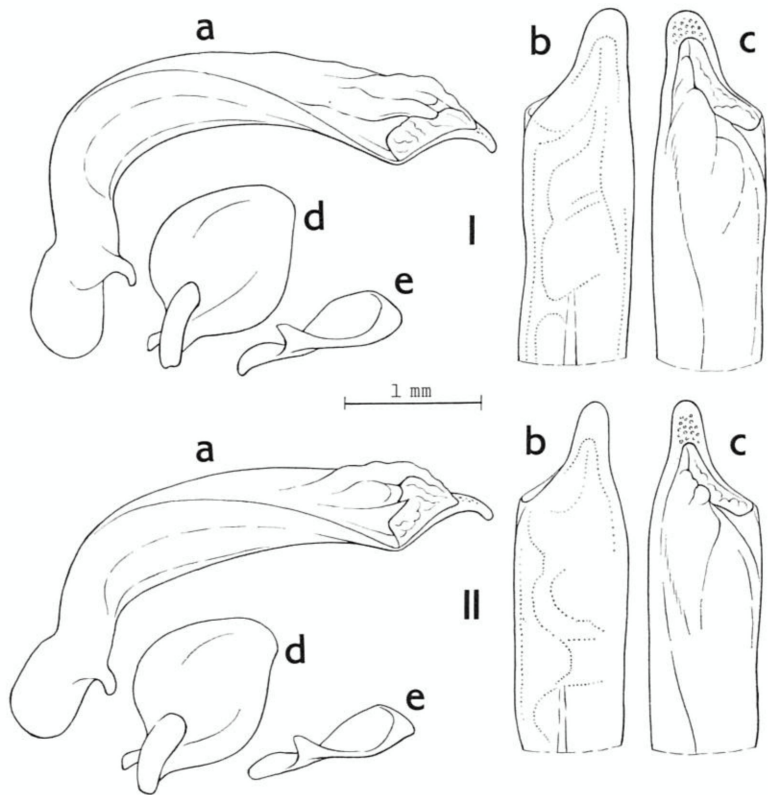
備考：本種は色彩, 点刻等は *C. virgulifer* に似ているが, 体形は明らかに細長く, 触角も長く, 前胸背板の形も異なる。とくに翅端紋は *virgulifer* や *hamifer* では前方内側が第3条溝に

接し, 部分的にわずかにこれを越える程度なのに比べて, 本種では十分に第2条溝に達し, ときにこれを越えることもあり, 後半の帯状部も細く, 翅端近くで外縁に接する点で一見して識別できる。

Java産の個体はやや大きく, 体形, 色彩に大差ないが, 翅端紋がやや細く, 前半部の凹凸が目立つ。陰茎は西表島産のものほど湾曲せず, 先端片もより細長い。下面の隆起線や開口部, 側片の形態に大差はない。



第2図 *C. pictus* CHAUOIR ミナミアトワアオゴミムシ 翅端紋
a. Java産雄; b. 西表島産雄



第3図 *C. pictus* CHAUOIR ミナミアトワアオゴミムシ 雄交尾器
I. 西表島産; II. Java産: a. 陰茎側面; b. 同腹面前半; c. 同背面前半; d. 左側片; e. 右側片

参考文献

- ANDREWES, H. E., 1941. Papers on Oriental Carabidae.—XXXVII. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (11), 7: 307-317.
- BATES, H. W., 1873. On the geodephagous Coleoptera of Japan. *Trans. ent. Soc. Lond.*, 1873: 219-322.
- 1891. List of the Carabidae (Ord. Coleoptera) obtained by P^{re}re CARDON in Chota-Nagpore. *Ann. Soc. ent. Belg.*, 35 (C. R.): 324-339.
- 1892. Viaggio di Leonardo FEA in Birmania e regioni vicine. XLIV. List of the Carabidae. *Ann. Mus. civ. Stor. nat. Genova*, 32: 265-428.

CHAUDOIR, M. DE, 1856. Mémoire sur la famille des Carabiques 6^e partie. *Bull. Soc. Nat. Mosc.*, 29(3): 187-291.

— 1876. Monographie des Chléniens. *Ann. Mus. civ. Stor. nat. Genova*, 8: 1-315.

CSIKI, E., 1931. Carabidae: Harpalinae V. In JUNK & SCHENKLING, *Coleopterorum Catalogus*, pars 115 (pp. 739-1022). W. Junk. Berlin.

笠原須磨生, 1981. 八重山諸島で採集した歩行虫類 II. 北九州の昆虫, 28: 59-68, pl. 7-8.

UENO, S.-I., 1964. Notes on carabid beetles from the Amami Group of the Ryu-Kyu Islands. *Kontyû, Tokyo*, 32: 249-263.

(千葉県船橋市)

○ふたたびアマギカラカネハナカミキリについて

私は本誌(49号 p. 5, 1980)に、主として♂交尾器の構造から、*Gaurotus amagisana* OHBAYASHI アマギカラカネハナカミキリを *G. doris* BATES カラカネハナカミキリの別亜種として取扱うよりも、独立した種と考へたほうがよいと述べた。このことはアマギカラカネハナの原著者であられる故大林一夫氏に、ご生前なんらかの形でお伝えておいたらしく、最近になってご子息の大林延夫氏からの私信で知った。

ところが最近中根猛彦博士から、同氏が保管しておられるアマギカラカネハナの paratype は普通のカラカネハナ型であること、さらに高桑正敏氏からも伊豆天城産の交尾器を調べられた結果、同様にカラカネハナと変わりなかつた旨それぞれ書信でご注意いただき、他にも2,3似たようなご意見をうかがった。

さて、前稿で筆者が述べたことからは、主に水野辰司氏の努力で日本各地から集められた進化生物学研究所所蔵の数百個体のカラカネハナカミキリを調査した結果の要約である。この標本群の中から検出した前波鉄也氏採集の伊豆水生地産の1個体で、紫銅色でにぶい光沢を持ち、ほぼアマギカラカネハナの範ちゆうに入ると思われる個体によるものであって、過去にカミキリムシに興味を持たれる2,3の方々はこの事実をお知らせしておいたが、その後、顧られる様子もないので私自身の手で書きとめておこうと考へたわけである。

ところが前述のように、カラカネハナと異なる交尾器を持つものがアマギカラカネハナでないとする私の考へがなり立たないことになる。そこで真のアマギカラカネハナはどのような交尾器を持っているか holotype を調査する必要がある。そこでタイプ標本を保管しておられる大林延夫氏に holotype の貸与をお願いしたところ、快くお許しをいただき、調査することができた。その結果は私の予想に反してその交尾器は普通のカラカネハナと全く同様のものであって、私がアマギカラカネハナと考へたもの

は別の新しい種であるという結論に達した。また、これとは別に、私自身が郡山信夫、新井久保氏らや中村俊彦博士らのご協力で富士山麓で採集した標本は、上の両型とも異なる別の1型があることを知った。この富士山麓の標本群は、普通のカラカネハナによく似た色調で、多少油脂光沢を持ってはいるが、特記するほどの外形の特徴はなく、ほぼカラカネハナカミキリの変異巾の範ちゆうに入る。しかし♂交尾器の左右の側片は、伊豆水生地のものと同様に細長で、しかも基部から分岐しており、短い感覚毛を広く散生している第3型であることを知った。なお比較のため中村俊彦博士所蔵の北海道から九州までの200個体以上の標本を研究させていただいた結果では、他に異った型を見出すことができなかった。これらの詳しい結果は別稿で報告することとして、とりあえず前稿の訂正と第3の型の存在を報告することにした。大林延夫氏、中村俊彦博士をはじめ前述の諸氏に厚く御礼申し上げる次第である。

(多摩市, 三宅義一)

○故野村 鎮氏蒐集品

一昨年逝去された故野村 鎮氏が蒐集された400点の完模式標本(holotype)を含む31,000余点に及ぶコレクションは今回、国立科学博物館動物学研究部に正式に保管されることになった。このコレクションは主としてコガネムシ科、クワガタムシ科などの腮角類の標本からなるが、氏が研究を続けられた、ドロムシ科、ナガドロムシ科、ゴミムシダマシ科、ナガクチキムシ科、ハナノミ科、オオハナノミ科、アリモドキ科(イッカクチュウ科)なども多くの重要な標本が含まれており、その方面の研究者にとっては必見のものである。これらの標本はコレクションラベル付けなどの整理作業が終り次第、他の館保有の標本と同様に、研究者の希望によって公開されることになるであろう。なお、このコレクションが科学博物館に保管されることになるまでに種々御尽力願った、井上 寛、小林裕和、長谷川仁、および吉田 晶ら諸氏の御厚情に対し厚く御礼を申し上げる。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

最近入手した G. LEWIS の旧蔵本

大野正男

George LEWIS は、今さら改めていうまでもなく、日本の甲虫研究史を語る上で忘れることのできない重要な研究者・採集家である。この LEWIS の旧蔵本が、最近、Asher, Junk などオランダの古書店にしまわった。

いきさつは、LEWIS の没後、蔵書の大部分がロンドンの Linnean Society に寄贈され、その Library に納められていたが、この Linnean Society が、何かの事情でこれを処分したものらしい。LEWIS の旧蔵本以外にも、Linnean Society の蔵印のある本が、同時に多数しまわったことで、おおよその想像ができる。

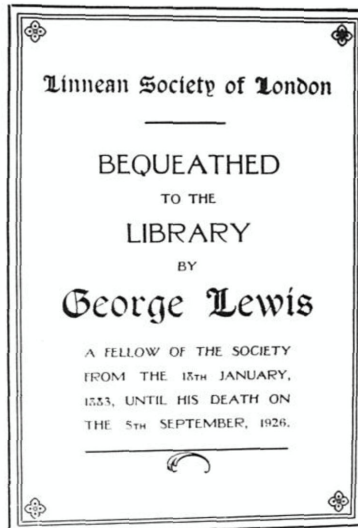
筆者はいつもの調子で Asher のカタログから、また久しぶりに発行された Junk のカタログから、今年の春以来多数の文献を購入したが、その中に Linnean Society 関係の放出本が12冊、さらにその12冊の中に LEWIS の旧蔵本3冊が含まれていたことでこの事実気づいた。

今回筆者が入手した LEWIS の旧蔵本は、CROTCH, C.R. : A revision of the Coleopterous family Coccinellidae (1874), MATTHEWS, R.A. : A monograph of the coleopterous families Corylophidae and Sphaeriidae (1899), CHAPUIS, F. : Monographie des Platypides (1865) の3冊で、いずれも甲虫関係のモノグラフとして重要な文献である。このうち、筆者にとって特に興味深かったのは、はじめに挙げた CROTCH のモノグラフであった。この本には、LEWIS による日本産テントウムシに関する自筆メモまで添付されていたからである。

メモによると、LEWIS は本書を1875年8月22日に入手しているが、4日後の8月26日付で、この書の中から日本産テントウムシの種類をぬき出し、これを“List of Japanese species given in this volume”として整理しているのである。1875年といえ、LEWIS が第1回の日本採集行から帰って間もない頃であり、さらに数年後に第2回の訪日採集行(1880~1881)を控え、最も日本づいていた時期であったと考えられる。CROTCH の本を手に入れてから僅か4日間で、上記のリストを作成していることなど、この辺の事情を物語る一つといえるのではなからう

か。

もっとも、本書に記録された日本産のテントウムシは、その大部分が LEWIS の第1回日本採集行によってもたらされた採集品によるもので、こうしたリストを作成しておくことが、LEWIS にとって必要だったといえなくもない。また LEWIS は、自身でもテントウムシに対しては特別の関心をもっていたらしいので(例えば、第1回の採集品については1873年に“Notes on Japanese Coccinellidae”を Ent. Mon. Mag. に、さらに第2回採集行後の1896年には“On the Coccinellidae of Japan”を Ann. Mag. nat. Hist. London に発表していることとわかる)、CROTCH のモノグラフを見て、日本



- East of Japanese Species given in this Volume.
- 877. *Spilachna admirabilis*rotch
 - 87. *Spilachna 25 punctata* Fab
 - 106 *Cyanea* *variegata* Fab
 - 110 *Coccinella* *12 unicolor* Gyll
 - 116 *Coccinella* *8 punctata* Fab
 - 117 *Coccinella* *transversopunctata* Feld
 - 117 - " - *7 punctata* Hbst
 - 117 - " - *Bruckii* Muls. Germ
 - 122 *Cyis* *15 maculata* Hbst.
 - 123 *Pygocampa angustata* Fall
 - 134 *Nea* *12 guttata* Bda.
 - 145 - " - *cinerea* Fab
 - 145 *Anisocaria* *14 guttata* Hbst
 - 145 - " - *15 guttata* Fab
 - + 153 *Coleophora unguiculata* Fab
 - 167 *Prophyla complanata* Hbst
 - 171 *Synonychia fraudis* Hbst
 - 176 *Perania* *45 long* Fab
 - 178 *Ilomoea quadriflorata* Hbst
 - 181 *Chilocorus* *tristis* Hbst
 - 184 - " - *uspinus* Hbst
 - 185 - " - *reivikulskii* Hbst
 - 198 *Platynopsis Lewisii* N.S.
 - 201 *Sticholobus* *sublineatus* N.S.
 - 201 - " - *punctata* N.S.
 - 203 *Cyphogonus arcuatus* Hbst
 - 203 *Chilocorus* *1875*
 - 253 *Parus* *lineatus* Hbst.

写真. 左: G. LEWIS の遺贈本であることを示すロンドンリンネ協会の蔵書ラベル。

右: CROTCH のモノグラフに添付された G. LEWIS 直筆の日本産テントウムシのリスト。

産テントウムシのリストを作ることなど、あるいは当然のことであったのかも知れない。

いずれにせよ、CROTCH のモノグラフに残された、約1世紀前の LEWIS 直筆のメモは、こうした背景の中で見なおしてみたとき、さまざまな感慨がわきおこり興味がつきない。

(附記) 最近、オランダから甲虫関係の図書を購入された人の中には、LEWIS の旧蔵本を入手された人が、まだ何人かおられるのではないかと思う。LEWIS 関係の資料の一つとして、どのような旧蔵本が日本に入ったかを記録しておくことも無意味ではなからう。該当される方は、差し支えない限りお知らせおき下されば幸いである。(東洋大学)

極東地域におけるエグリサビキコリ

鈴木 互

エグリサビキコリ *Danosoma fasciata* (LINNAEUS) は、体長15~20mm、翅鞘に淡黄白色の鱗状毛による帯状紋を有する比較的美麗なコメツキムシである。ヨーロッパからシベリア、樺太にかけて広く分布することが知られているが、個体数は少なく、極東地域における本種の報告は余りないようである。筆者は最近、国立科学博物館所蔵のコメツキムシ標本の中に日本（北海道）、樺太、朝鮮および満州産の本種を検査することができたので、ここに報告しておきたい。なお、本種は日本、朝鮮および満州（中国東北地区）からは従来未記録であった。

[檢視標本]

日本：1頭、北海道札幌市円山，30. vi. 1941，西尾美明採集（写真E）。

樺太：2頭，Komatoi，11. vii. 1940，河野広道採集（写真B）；1頭，豊原，1. viii. 1942，採集者不明（写真C）。

北朝鮮：1頭，咸鏡南道，Shimohakusen，24~29. vii. 1943，内田一採集。

満洲：1頭，北部大興安嶺，6. vi. 1942（写真D）；1頭，同，25. vi. 1942；2頭，北部大興安嶺ピストライヤ基地，28. vi. 1942（以上4頭は全部今西錦司探検隊採集品）；1頭，アガチャカン，5~11. viii. 1944，河野広道採集。

本種はヨーロッパでは棲息地が高い山に限られており、幼虫はマツ類の枯木に食入り、カミキリムシの幼虫、特に *Tragosoma desarium* LINNAEUS（ノコギリカミキリ亜科の1種）の幼虫を捕食して

生育することが知られている。しかし、日本にはこのカミキリムシが棲息していないので、何を捕食しているのか興味がある。また、かなり低い所で採集されていることも併せて注意を惹くが、生態は全く不明である。

三輪勇四郎博士は1914年8月10日に樺太の Nairo（内路）で一色周知博士によって採集された鱗状毛の脱落している1雄標本に基づいて *Adelocera sachalinensis* と云う新種を記載したが、後に新鮮な個体とヨーロッパの *fasciata* との比較を行い、これらを同一種と認め、1934年に *sachalinensis* MIWA を *fasciata* LINNAEUS のシノニムとした。ヨーロッパから樺太にかけての地域にはこの他に *Danosoma* 属の模式種である *constersa* (GYLLENHAL)（写真F）という種類が知られているが、この種類は前胸背板の後縁角に隆起線を有するので、*fasciata* とは容易に区別することができる。

なお、*Danosoma* 属は比較的最近まで *Lacon* 属のシノニムとして扱われていたが、HAYEK (1973) の研究では「爪の基部に setae を欠く」という形質を評価し、setae を持つ *Lacon* 属から区別して取り扱っている。

最後に、本報告を草するに当たり、貴重な標本を検査する機会を与えられ、種々ご教示を賜った黒沢良彦博士、西ドイツの KASCHEK 博士、ならびに文献其他でお世話になった柴田泰利氏に深くお礼を申し上げる。

（東京農大）

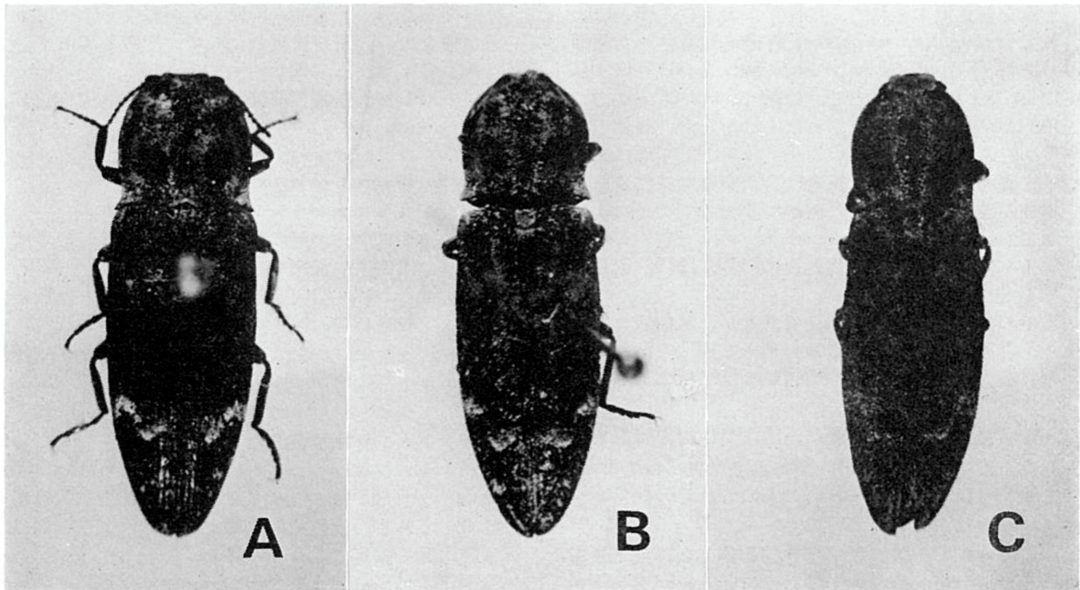


写真 A~C: *Danosoma fasciata* (LINNAEUS) エグリサビキコリ A. ヨーロッパ・オーストリア産一翅鞘の帯状紋が明瞭な個体；B-C. 樺太産一翅背面の淡黄白色毛の発達している個体。

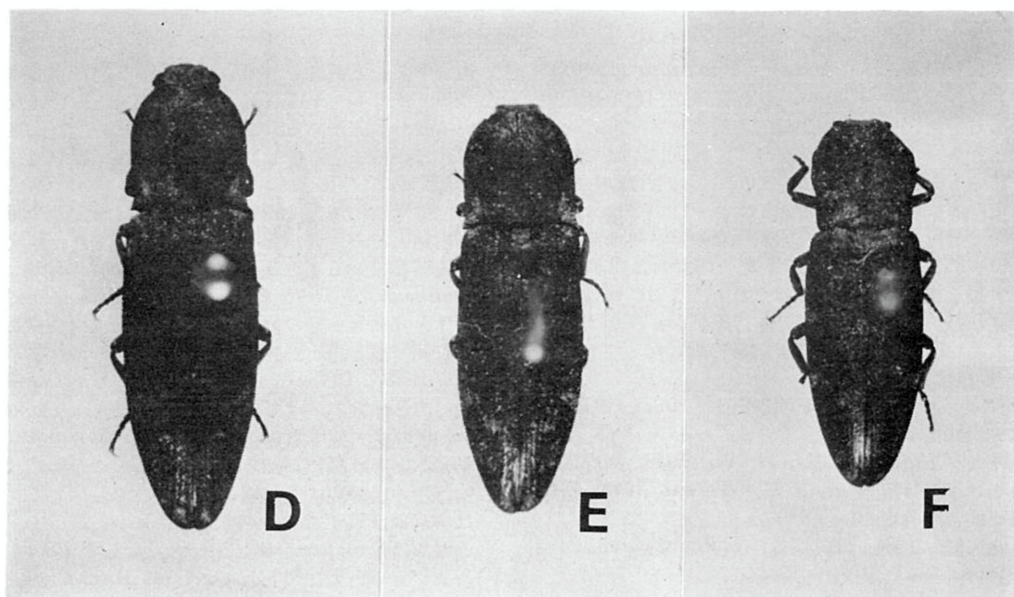


写真 D~E: *Danosoma fasciata* (LINNAEUS) エグリサビキコリ D. 満州産—淡黄白色毛が全体に未発達で帯状紋がやや不明瞭な個体; E. 北海道産—同; F. *D. conspersa* (GYLLENHAL), ヨーロッパ フィンランド産—前胸背板は中央で強く横に張り出すが 基部では狭まる。

○ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキの雌の記録

ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキは宮武睦夫氏によって愛媛県面河溪で1955年7月27日に採集された1雄を模式標本として、1966年に大平仁夫博士によって *Hypoganus miyatakei* と命名記載された種類である (*Trans. Shikoku ent. Soc.*, 9; 41~42, fig. 1, A & B)。その後大平博士は熊本県市房山で1969年7月28日に採集された1雄を記録 (昆虫と自然, 8 (11): 26) しているが、依然として雌は未知のままであった。最近筆者は、山梨県で採集された本種の雌個体を検することができたのでここに記録しておきたい。

1♀, 山梨県小金沢林道, 8. viii. 1979, 酒井貢採集。

雌の体形は雄とほぼ同様であるが、触角はより短く、前胸背板の半分をやっと越える程度であることと、前胸背板が幅広く、両側がほぼ平行であるなどの点が異なる。

筆者は上記3記録の他に、熊本県市房山で採集された1雄 (2. viii. 1974, 酒井雅博採集, 科博所蔵) も検しているが、興味深いことにこれらの採集データはみな7月下旬以降であった。

未筆ながら、国立科学博物館の標本を拝見させていただいた黒沢良彦博士ならびに標本を御恵与下さった東京農大の酒井 貢氏に厚くお礼申し上げます。

(東京農大, 鈴木 互)

○富山県未記録のカミキリムシ2種

富山県下から記録されているカミキリ科は181種 (再検討を要するものと思われる種もない訳ではない) であるが、筆者は、同県下未記録のカミキリムシ2種を次のとおり採集したので、記録しておく。

採集日: 9. v. 1981.

採集地: 富山県婦負郡細入林檎原 (御鷹山林道)

1. *Lemula rufithorax* PIC

ピクニセハムシハナカミキリ 1頭。

2. *Plagionotus christophi* KRAATZ

クリストフコトラカミキリ 3頭。

前者はイタヤカエデに訪花していたもの、後者はコナラの伐倒木に飛来していたものである。

(文献) 1. 富山県昆虫研究会 (1979) 富山県の昆虫: 420-434

2. 北村征三郎 (1980) 富山県昆虫研究会編 “富山県の昆虫” に追加する甲虫, AMICA, 18: 22-24 (富山県富山市, 川原 誠)

○エンマムシシダマシ日高山系の記録

エンマムシシダマシ *Sphaeritus polistus* MANNERHEIM は本邦においては北海道の大雪山と利尻島に分布しており、比較的稀な種である。今回、筆者は日高山系で採集できたので報告する。

1頭, 日高町ヌカピラ岳, 27. vii. 1980.

なお、本種は山頂の右下より得たものである。

(東京農大, 松本俊信)

○福井県産カミキリムシ類5種の記録

カミキリムシ類はチョウ、トンボについて分布がよく判っており、県別分布表を作っておいでの方もあるようであるが、手元に福井県未記録の種があるので記録しておきたい。採集地はいずれも福井県で、特記しないかぎり筆者採集・保存である。

1. ヒヤヤマコブハナカミキリ *Enoploderes bicolor* OHBAYASHI
1♂, 南条郡今庄町藤倉山, 23. v. 1981, 標高600 mほどの尾根道で飛翔中のものを捕えた。
2. ヨツボシチビヒラタカミキリ *Phymatodes quadrimaculatus* GRESSITT
1♀, 南条郡今庄町木ノ芽峠, 28. v. 1978, 枯枝のピーティング。
3. ムネマダラトラカミキリ *Xylotrechus grayii* WHITE
1♂, 三方郡三方町雲谷山, 15. vi. 1980.
4. トガリバアカネトラカミキリ *Anaglyptus nipponensis* BATES
1♀, 小浜市下根来鬼ヶ谷, 6. v. 1979, 花上。
5. シナカミキリ *Eutetrappa sedecimpunctata* MOTSCHULSKY
1♂, 大野市南六呂師, 22. vii. 1980, 後藤哲男採集, 筆者保存。

(福井大学教育学部, 佐々治寛之)

○石垣島のエゾカタビロオサムシ

筆者の不勉強で既に記録されているかもしれないがエゾカタビロオサムシ *Campalita chinense* (KIRBY) を石垣島で採集しているので報告しておきたい。

- 1♂, 石垣島上原 (Uebaru), 17. vii. 1981, 筆者採集

夜間採集の際灯火に飛来したものである。なお、南日本の島嶼部での記録として、楠井による久米島 (昆虫学評論, 1978) および平山による口永良部島 (月刊むし, 1980) が知られている。

(東京都港区, 森田誠司)

○クロズアカチビゴモクムシ栃木県の記録

最近, HABU (1981) より我国では初めて北海道と宮城県から記録されたクロズアカチビゴモクムシ *Acupalpus (Setacupalpus) hilaris* TSCHITSHÉRINE の詳細な記載をみていて、以前採集したものの同定できぬままになっていた標本を思い出し、調べてみたところ本種であることが判明した。まだ記録の少ない種なので分布資料として報告しておく。

- 3♂♂2♀♀, 栃木県塩原, 16. ix. 1976.

池畔の塵芥下より採集したように記憶している。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

○クチキマグソコガネ奥多摩泉水谷で採集

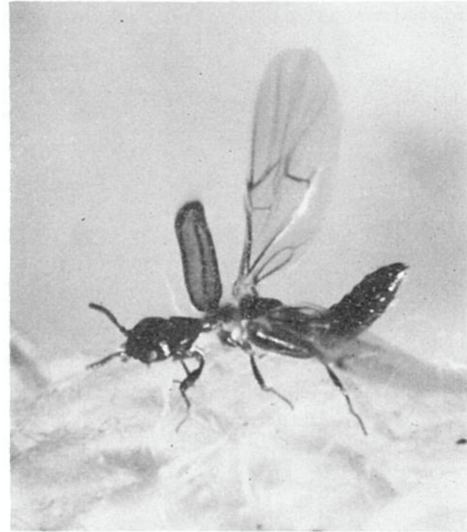
クチキマグソコガネは会津で黒沢良彦先生が最初に発見されて以来採集記録の少ない甲虫である。筆者は奥多摩泉水谷で朽木中より採集したので報告しておく。なお、朽木の樹種は不明である。

- 1 ex. 奥多摩泉水谷, 30. x. 1980, 中村芳樹採集。

(日野市, 中村芳樹)

○チビナガヒラタムシの行動

筆者は始原亜目に属するチビナガヒラタムシ *Micromalthus debilis* LeCONTE の日本からの記録と、その生態と形態を本誌 (44: 1-4) に報告したが、その後の観察から明らかとなったことがらを記しておきたい。



本種は1978年の夏から今日まで飼育を続けているが、1980年と1981年(本年)の8月上旬に多数の成虫が朽木から出現した。兩年共、100頭余りの個体を検したがすべて♀であった。成虫は飛翔力が全くなく、写真にみられるように、歩行しながら、あるいは静止して後翅を活発にふるわせる。腹部末端を上方に向けてのこの行動は性フェロモンを発散させているようにも見え興味深い。朽木から出現した成虫の寿命は5日間以内で、卵巣が発育することなく死滅した。なお幼態成熟♀から生みだされた二爪幼虫(1齢幼虫)は6月上旬から出現する。

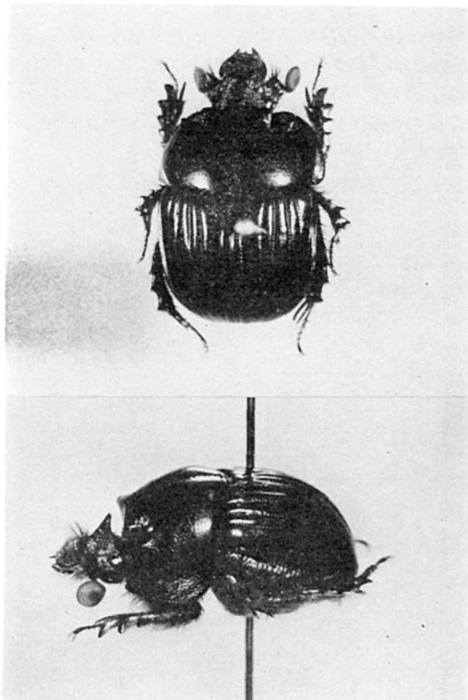
(横浜市港北区, 林長閑)

○キヨヤマセンチコガネ雄の初見記録

キヨヤマセンチコガネ *Bolbocerosoma kiyoyamai* NOMURA は、台湾奮起湖産の1♀に基づき1978年に記載されたが、少ない種のように中型の比較的よく目立つ種であるにもかかわらず、その後の記録を見ない。また、益本(1978)の解説にも図示されておらず、依然として雄も未知であった。筆者は模式産地よりはるか隔った台湾北部の低山地より、本種の雄を採集しているのを記録しておく。

- 1♂, 台北市大屯山, 2. vi. 1980, 境野広行採集。

大屯山山頂より北投方面へ下る途中、標高500m付近の林内で地表を歩行しているものを採集した。同所はときどき牛の放牧が見られ糞塊も多いが、概して糞虫類は少なかった。なお、雌については原記載に図示されているが、雄は前述のように知られていなかったため、全形写真とともに特徴を以下簡単に記しておく。



体長; 15.5mm, 幅; 9.5mm. 殆ど黒色で上図は光沢があるが、上翅は光線の加減によって僅かに藍青色を帯びる。体下面は光沢がなく茶褐色の長い毛が密生する。脚と口器はこげ茶色。触角球稜部は黄褐色。頭は粗く点刻されサメハダ状、前縁は弧に近い台形、中央に角突起を直立させその先端は尖る。前胸背前方は横隆起を出し、前縁は湾入するが両側は深く凹陷して短い角突起になる、点刻は粗大で中央域を除いてよく目立つ。上翅は深い条溝を具え、各条溝内は点刻が並ぶ。(東京都港区, 境野広行)

— 連絡・報告 —

大変遅れまして申付けありませんが、やっと54号をお届け致します。世話人の多忙のためとはいえ大変ご迷惑をおかけ致したことをお詫び申し上げます。次号からは岡島秀治、笠原須磨生両氏に編集の労をお願い致しましたので、次第に定期に刊行できるようになると思います。よろしくお願い致します。

(黒沢)

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!
1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)
なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。
〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)
振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

○キンヘリタマムシ2種の栃木県からの記録

キンヘリタマムシ *Scintillatrix bellula* (LEWIS, 1893) は南会津のタマムシ2種の報告¹⁾、および日本産タマムシ科解説⁶⁾により岩手県と福島県から記録されているが、筆者は栃木県の五十湖地方産の個体を所蔵しているので記録しておく。

2♂♂3♀♀, 栃木県塩谷郡栗山村湯西川, 2. vi. 1974, 鈴木洋一採集。

鈴木洋一氏によれば、これらの個体はニレ類(樹種不明)の直径8cm程度のそれほど古くない伐採木の樹皮下から得た個体、およびその伐採木に飛来した個体を採集したと聞いている。

また、エサキキンヘリタマムシ *Scintillatrix kamikochiana* (OBENBERGER, 1940) も同じ地方で採集されており、筆者が所蔵しているので付記しておく。

1♀, 栃木県塩谷郡栗山村夫婦淵, 30. vii. 1979
鈴木洋一採集。

キンヘリタマムシの記録について御教示を賜った黒沢良彦博士、報告することを勧められた秋山黄洋氏、また御好意により標本を恵与された鈴木洋一氏に厚く御礼申し上げます。

- 1) 衣笠恵士: 甲虫ニュース No.6, p.2 (1969)
- 2) 黒沢良彦: 甲虫ニュース No.8, p.4 (1970)

(横浜市中区, 服部宇春)

○ミツギリゾウムシのトカラ悪石島の記録

ミツギリゾウムシ *Baryrhynchus poweri* ROELOFS は本州以南の各地に広く分布するが、トカラ悪石島は多くの採集者が入っているにもかかわらず、本種の採集記録がないので、筆者の所有している標本の記録を報告しておく。

1♂, トカラ悪石島, 31. vii. 1976, 伊藤主計採集。

トカラ悪石島には、特産種であるヨツモンミツギリゾウムシ *B. tokarensis* OHBAYASHI et SATO が多産するが、ミツギリゾウムシの方は非常に少ないらしく、同島産のミツギリゾウムシを見たのは上記の1例のみである。(和歌山県有田郡, 的場 績)

甲虫談話会

会費(一カ年)2000円、次号は3月31日発行予定。

投稿〆切は1月31日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製
インロー型標本箱中 ¥1,500, 送料一箱につき都
内及第一地帯: 3個以下¥1,300, 4個以上¥850
(以下同様), 第2地帯¥1,500, ¥950, 第3地帯
¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作
販売しています。カタログを御請求下さい。(¥160)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479